

## 第 1 回青森県生涯学習審議会会議録

日時	平成28年11月7日(月) 9:40～11:40
場所	青森県警察本部 6階 教育委員会室
出席者	<p>《 委 員 》 敬称略 13名 (欠席2名)</p> <p>天内 不二子 上澤 司 奈良 陽子 岡 詩子 菊地 倫子</p> <p>奥島 涼子 白戸 美也子 出崎 真里 柏谷 至</p> <p>松本 大 住吉 治彦 増田 由美子 工藤 清子</p> <p>(長岡 俊成 春藤 千秋)</p> <p>《青森県教育長》 中村 充</p> <p>《 事務局 》 5名</p> <p>児玉 政光 (生涯学習課長)</p> <p>渡部 靖之 (学校地域連携推進監)</p> <p>森田 勝博 (企画振興グループマネージャー) 他2名</p> <p>《 その他 》 2名</p> <p>仁和 由紀人 (学校教育課 課長代理)</p> <p>小森 直樹 (総合学校教育センター 教育活動支援課長)</p>
内 容	<p>1 開 会</p> <p>2 教育長挨拶</p> <p>3 会長、副会長選出</p> <p>4 案 件 (1) 審議テーマについて (2) その他</p> <p>5 閉 会</p>
配 付 資 料	<p>次第</p> <p>青森県生涯学習審議会委員名簿</p> <p>座席図</p> <p>資料1 青森県生涯学習審議会設置条例</p> <p>資料2 生涯学習推進をめぐる国と県の施策の動向について</p> <p>資料3 第13期青森県生涯学習審議会の審議テーマについて</p> <p>資料4 第13期青森県生涯学習審議会の今後の予定</p>
	<p>&lt;参考資料&gt;</p> <p>青森県の社会教育行政</p>

## (1) 会長、副会長の選出

会 長 柏谷 至 (青森大学社会学部 教授)  
副会長 奥島 涼子 (東通村教育委員会 教育長)

(◇会長、副会長 ◆委員 ○事務局)

## (2) 審議テーマについて

### ◇会長

本日の案件は、これからの審議テーマを決めていただくことである。まずは、事務局から施策の流れと話し合いの視点について説明してもらおうことにしたい。その後、テーマについて審議し、方向性を決めたい。

○事務局より、審議テーマ決定の参考として資料2・資料3を説明

※資料2「生涯学習推進をめぐる国と県の施策の動向について」

資料3「第13期青森県生涯学習審議会の審議テーマについて」

### ◇会長

若者にフォーカスをあてた議論をしてほしいということであるが、資料を整理してみると、若者といっても、活動のリーダー層をより延ばすことと地域で活動する若者の裾野を広げることの両面があり、また地域についても、学ぶ場としての地域と活躍の場としての地域という二つの側面があるように思う。まずは、若者について、自由に御発言いただきたい。

### ◆委員

周囲を見ていると、夢や希望もなく就職している若者が多いのではないかと感じる。夢や希望を持たない若者が会社に入ってきて使えない人間になっていることが多いように感じる。逆に、夢や希望を抱いている若者は、自分のやるべきことを理解して、主体的に取り組んでいる。そのような若者たちの多くは東京へ行ってしまう。

### ◆委員

青森に夢と希望を持つということは、青森のことを知り、好きになるということだと思う。早い時期から子どもたちに地元にいるいろいろな楽しいイベントや働ける企業があるという情報を流していくことが大事なのではないか。

### ◆委員

青森でのボランティア体験をした若者は、青森の良さに気づくことができると信じている。他の地域に行くと、あおもりの良さを深めることができると思う。一旦外へ出てもいいから、帰って来られる場所はここにあるよというような地域づくりをしていくことが理想である。やはり、小さい頃から青森の良さを教えていく、伝えていくことが必要なのではないかと強く感じている。

#### ◇会長

これまでの発言を少し整理したい。教育では、地域について学ぶ機会が確実に増えてきている。しかし、学校卒業後になると、地域とつながっていけないのは課題ではないか。学校教育と社会教育をどうつなげていけばよいのか、議論していくべきだと思う。その意味でも、大学生に地域に残ってもらう、地域で活躍してもらうことを目指して、県内の大学が取り組んでいるCOCプラス事業について、説明いただけないか。

#### ◆委員

今、大学で行っているのは、地域で様々な課題があるとしたときに、そこに学生を派遣して、協働的に地域の課題を解決していくという教育実践が行なわれている。

だが、これまで全く関わりのなかった人たちの中に入り、一緒に地域の課題を解決していくことが本当にできるのか不安に感じるところもある。また、そこに協働した学生たちは4年後に大学を離れる訳で、課題がある。

若者が高校を卒業する前の段階で、どのようなアプローチができるかと、実際に青森に住んでいる大学生以上の若者に対してどういうアプローチをしていくかがポイントになると思う。一度県外へ出た若者が地元の若者と交流することも、若者の裾野を広げることに効果があるのではないか。

#### ◇会長

地域で活動する学生については、活躍する場をどうするかにもつながっていくのだと思う。大学生が来て、地域のイベントに関わっている地域があるが、地元から見た手ごたえをどのように捉えているのか聞かせていただきたい。

#### ◆委員

学生が関わってくれることで、私たちが元気になれる。日常の生活の中に、若者が来てくれるだけで街の雰囲気が明るくなる。学生たちは、大人と見方が全く違う。学生たちからよい刺激を受けて、まちの若者たちの意欲が掻き立てられたように感じる。しかし、若い人たちからは、ぼんやりしているというか危機感が感じられない。若者をどうするかということは緊急の課題ではないかと感じる。

#### ◇会長

若者の中でも、活動に積極的に参加している者がいるし、ぼんやりしている者もあり、両方を見ていかないといけない。がんばっている若者に接触すると、自分もがんばらなくてはという思いになる。それが上手く回っていくと理想的な状況になる。今度は、若者の立場からの発言をいただきたい。

#### ◆委員

(若者を代表して) 私自身としては何も苦勞せずに、楽しく活動に参加している。メンバーにも恵まれていると感じる。他の若い人が地域に参加するとき、私は情報がとても大事だと思っている。私は、情報をたくさん触れられる場所というのは学校だと思っている。学校のいいところは、半強制的なところだ。現在は、インターネットで検索するとたくさんの情報を得ることができる。しかし、子どもたちは、その検索情報が狭い範囲でしか得られていないということに気づいていないのではないかと感じている。

やはり強いのはリアルな情報で、その情報を半強制的に与えられることが大事だと思

う。日常の中に非日常を取り入れて楽しむことができる情報を広く強制的に与えるということが大事なのではないか。

#### ◇会長

発言の中には、今後の議論の論点になることが多く含まれていた。例えば、当たり前だと思っていることを少し違った視点で見る経験が大事だということだ。現代の情報社会の中で、情報の選択肢が増えたように感じるが、実は自分の価値観に合致する狭い範囲の情報にしか触れていない。自分の価値観とは全く異なる考え方の人と触れ合う機会が、大事なのではないか。半径30mの中で完結してしまう世界で生活している若者が多くなっていることも重要な視点だと思う。

#### ◆委員

今、自分の息子が就職活動をしなくてはいけない時期に入っている。東京へ行って、趣味をするにしても、何か活動するにしても、結局は働いてお金がなかったら、何もできない。そういうことを達成できるものが東京にあるのなら行ってみたいという気持ちなのだと思う。地元のことは好きで、青森県はいいところだということは知っている。だが、ここでどうやって自分を活かしていけばいいのか、分からないのだと思う。若者が青森で未来を切り拓いていきたい、地域の活動に携わっていきたいと考えていても、その根底には仕事に就いていることが必要で、確固たる仕事が無かったら、心に余裕が生まれれないと思う。

#### ◇会長

日本経済全体で考えると今の世の中は人手不足に陥っている。10年後はどうなっているか分からないが、人材の取り合いになっている。青森で大切に育てた子どもたちに青森でどのように活躍してもらえるのか、一旦青森を出た子どもたちに青森に帰ってきてもらうための仕掛けをどうするかを考えていかなければならない。さらに、全然青森とは縁もゆかりもないけれど、青森に来たいと考えている人たちをどうやって受け入れていくかも重要だと思う。生涯学習という枠の中でどこまでできるのかは別として、若者と地域をどのようにつないでいくかは大きなテーマではないか。

#### ◆委員

私は学校支援コーディネーターの他に、高校生の県外就職の支援をしている。関東や関西に行っても、戻ってきってしまう若者が多いように感じる。進路指導の先生と話をしていても、戻ってきた生徒がその後どうしているのか、空白の状態となっている。

生き生きといろいろな活動をしている若者もいれば、私の周囲には自己肯定感が低く、引き籠ったり、生きづらさを感じている若者もいる。また、自分たちが住んでいる「青森」の良さを感じられないまま生活を送っている人々もいる。私の息子もそうであるが、進学や就職で県外にでていく若者たちにも「青森」を好きでいてもらいたい。

自分の生まれ育ったところを否定的にならずに、ここで生まれ育ってよかったなあと思ってくれる若者が増えてくれればいいなあと思うし、一つでも自信を持てるものがあるって、自分を肯定的に捉えて前向きに行動できる若者を増やすにはどうしたらいいのだろうかということを考えている。

#### ◇会長

学校は、強制的に毎日のように出席させているので、濃密な人間関係ができる。学校を卒業したあと、子どもたちが仕事を辞めていても誰も知らないというのは、そうした人間関係が切れてしまった若者が相当数いることを意味している。今まで、その辺は地域、親類など、専門用語では社会関係資本（＝ソーシャルキャピタル）というが、人間関係の厚みでカバーしていたところがあった。少しずつ地域が薄くなり、把握できない子が増えているというのは、大きな問題だろう。

#### ◆委員

中学校の立場から、前任校ではキャリア教育に力を入れていた。子どもの強みと弱み、地域の強みと弱み、スワット分析をしてみたところ、生徒の自己肯定感や自己有用感は非常に低いという結果になった。どこを切り口にして生徒の自己肯定感や自己有用感を高めていけばいいのか話し合い、まずは、キャリア教育を通して生徒に夢実現のために自分の進路を切り拓くため、体験活動をさせ、行事と関連させながら地域や関係機関との連携を深めていった。キャリア教育では、小・中・高校の縦の連携と地域の横の連携が必要だということを現場にいて痛感している。

生徒たちがキャリア教育を通して、夢と希望をもって自分の進路を切り拓いていく力を身につけていくことが、不可欠なのではないかと考えている。そのことが、その後の若者の生き方に結び付いていくのではないかと考えている。魅力をしっかりとキャッチし、視野を広げ、地域に活かすということが、まち・ひと・しごと創生にも結び付いていく。このような循環をしっかりとつくるのが学校の大きな役割だと考える。

#### ◇会長

学校としても、自己肯定感や自己有用感を高めるために真剣に取り組んでいるということを紹介いただいた。今回の審議のテーマとの関連でいうと、地域の方が学校を支援してくれる体制が整っているというのは大きなことだ。地域が学校をサポートする体制をどのように構築していけばいいのかも、これから議論していかなければならないのではないと思う。

#### ◆委員

私たちの団体では年1回「かでで」という祭りを企画し、運営している。メンバーは、十数名しかいないのだが、この人数で運営できないような大きな祭りとなってしまっている。ボランティアの力に頼っている。若者の力は、とても心強く感じていて、小さい子と一緒に遊んであげたりとか、責任を持ってブースを担当してくれたり、すごく盛り上げてくれる。その様子を見ていると、今の若者は捨てたものではないなと感じる。地域の大人たちも、今の若者たちはしっかりしているとか、小さい子どもたちから元気もらったと言ってくれる。参加してくれたボランティアの生徒たちも、コミュニケーションの力も身に付いて、この生徒たちが、高校、大学と進学していても、また、地元に戻って来てくれることを期待している。五所川原でこういうことをやって面白かったよねということで、若者になってから遊びに来てくれる人たちもいるので、やっぱりいいことをやっているのだなあと思っている。

#### ◆委員

学校教育の中では、地域の良さを学ぶ機会というのは、10年前くらいと比較すると、大変増えているし、内容も進化している。特別支援学校でも、小さい頃から障がいのあ

子どもたちが、高齢者の方々とつながる機会をつくるのは、すごく大事なことだと思っている。本校では、交流及び共同学習ということで、地域の小学校や中学校と一緒に勉強する取組を行っている。また、町内会との活動も長く行ってきた。課題となっているのは、高齢者が主になっていることだ。この場に若者は出てこない。若者と特別支援学校のつながりを考えると、文化祭のときに、近隣の高校へボランティアを依頼し、多くの生徒たちに手伝ってもらっている。

高校卒業した後や大学を卒業した後に、ボランティアしてみたいなあと考えている若者のネットワークがない。若者の流出ということを見ると、幼稚園から高校、大学まで、「地域の良さ」というものを学ばせる基礎作りを一生懸命取り組まなければならないと改めて感じている。

#### ◇副会長

若者といったときに、東通村の漁業しながらソフトボールで活躍している人たちが頭に浮かんできた。その人たちは、近隣の会社員に声をかけたりして少しずつメンバーを増やし、裾野が広がってきている。ソフトボールを楽しむ若者たちは、伝統芸能継承の担い手でもあり、その人たちの一部は小学校の部活指導のお手伝いもしてくれている。ソフトボールに限らず、そういうグループをどのように育てていくかという対策は思いつかないのだが、地域の若者が生き生きと、他のことを楽しみながら活動している人たちを発信していくことが大事なのだと感じた。

#### ◇会長

仕事だったり、サークルだったり、地域の祭りだったり、一人何役もこなさなければならなかったりする状況は、当事者である若者にとっては大変なのかもしれないが、人間関係の分厚さという点から見ると、逆に羨ましいと感じる。地域の違いも考慮に入れた上で、共通している課題を見つけ解決の方向性を示していきたい。これまでの委員の発言を受けて、どのように整理されたか事務局からの説明をお願いします。

#### ○事務局

これまでの各委員の発言から、若者の環境には、学びと場とそれを活かす活躍の場、そして、仕事と生きがいの場があり、これらが全て融合されていないと地元青森に定着していかないのではないかとということ。会長から、若者にはリーダー層に対する支援と裾野を広げるための支援が必要であるということであったが、ボランティアなどの様々な社会参加活動を体験している若者は、非常に意識が高くなっているということ。その社会参加活動は、地域密着型であったり、世代間交流型であったり、地域コミュニティとの交流の場であったり様々である。参加した若者たちは、自己肯定感や自己有用感を高めることにつながっていくし、コミュニケーション能力を高めることにつながっている。ただ、その社会参加活動の情報を、広く厚く提供する必要がある、若者にしっかりと届くようにしていかなければならない。その情報は、若者に楽しいと思ってもらえるような工夫が必要であるということが整理された。

#### ◇会長

私なりに整理してみる。出発点として、若い人たちに青森で活躍してほしい、青森を好きになってほしい。さらには青森に戻ってくる人たちを増やしたいという想いがある。そのために検討すべき課題がいくつか指摘された。まず、青森にることによって自分の夢が実現できるとか、青森が好きになるという気持ちをどう育てていくか。また、学

校の活動に地域がどう積極的に関わっていくか、サポート体制をどうするか。さらに、学校卒業後にネットワークが切れてしまう状態をどう食い止めるのか、いったん切れてしまった関係をどうつなぎなおすのかという問題もあった。これらに対して、具体的な手立てを講じていかなければならない。情報の問題、活動の場の問題、経済面の問題など、いろいろな各論がありそうだ。今後は、これらの課題について、今まで県内外にどのような事例があって、それを各地域の現状にどのように合わせられるのか、もしくは、新しい取組方法を提案できるのか、議論していくという流れになると思う。

#### ◆委員

若者に目的意識がないと感じている。その若者たちを一人ずつ育成していくための方策を考えていった方がいいのではないか。私が思っているのはNPO法人とかいろいろあるが、それが事業として成り立つかどうかという部分での活動でなければならないと考える。継続できるものに構築していかなければならない。若者に考えさせる機会を与え、予算の問題ではなく、これを行うための計画を立てさせることがとても重要だ。大人はそのアシスト役に徹する。そうすることで、若者達は目的意識を高くもって行動できるのではないか。事業というのは、今回で終わりというように無くなるものではなく、継続されていくことが必要だ。継続するためには、お金が必要となる。寄付を集めるとかで運営していこうということを伝えると、パンフレットをつくってみようとかいろいろなアイデアが出てくる。また、計画をしっかりと立て、どのように運営していくかを牽引できる若者のリーダーを育成していかなければならない。やる気のある若者を集めて、各地区で行われていることを線にしていくことが大事で、リーダー育成にもつながるのではないかと思う。

#### ◇会長

継続が大事だということについて、私も同感である。先ほどの発言では金銭面での継続性についてお話しされていたが、人がどうつながっていくのか、事業自体がその後どのように発展していくのかといった面での継続性、違う言葉で言うと、持続可能性も重要である。さらにつけ加えると、ネットワークがポイントになるのではないか。単独の取組にするのではなく、同時多発的にみんなが動いていくことが全体の流れを造っていくのではないかと思う。

#### ○事務局

各委員の皆様の発言を聞いていて、若者が生き生きと活躍できるような青森県というのが一つ見えてきたのではないかと思う。そういう社会を目指して、それが持続可能で、継続的に行われるというような青森県をつくっていくために、手段として、やはり学びとつながりづくりというか、ネットワークが大事なのだということを確認していただいた。その辺を踏まえた上で、これから具体的な取組について、誰がどういうことをすれば、そういう社会が実現できるのかということをお聞きしたい。もう一つ、対象として、若者が生き生きと活躍できる社会を目指すのだが、学校とのつながりを、特に学校卒業後の若者を考えると、小学校、中学校、高校の教育を、郷土を知る、地域を知るといった働きかけが非常に大事だということも、発言の中にあっただけで、手段の中で、学校教育での方向性も示していければいいのかなと考えている。

◇会長

今、ホワイトボードに青字で書いてもらったが、大体こういうテーマでよろしいか。

○事務局

皆様から若者についてこちらから課題とかを提示いたしましたので、そのことについて、それぞれのお立場から方策等を出していただいた。それらを網羅して、議論を深めていくためには、若者が生き生きと活躍できる社会を目指すことが必要だと再確認できたが、「若者が集い、生き生きと活躍できる持続可能な社会づくりの在り方について」というふうに考えるが、審議テーマのたたき台としていかがか。

一般的な「社会」という言葉よりも「青森」という言葉を入れた方が具体的になるのではないかと考えるがいかがか。

◇会長

一方で市町村や町内会など、より小さな地域社会も含めたい気もするのだが、青森県の会議でもあるので、いいような気もする。

◆委員

社会という言葉は大きすぎる印象を持つ。さっきから出ているネットワークという言葉もあるので、例えば、社会ネットワークづくりとか、方向付けするような言葉にしてもいいような気がする。

◆委員

地域社会でいいのではないか。青森でいいのかという疑問がある。基本的な根っこは青森県の話になると思うが、他県から来る若者たちのことも含めたい。

◇会長

もちろん青森について話はしていくのだが、県外の人たちは関係ないということではない。逆に青森県をひとつのまとまりと考えるよりは、各地域や場面、組織によって異なるという、もう少し重層的なイメージだと思う。

◆委員

グローバルな社会になっていくのだから、若者を他県から受け入れもしていかなくてはいけない。青森は楽しいところだよということを働きかけていくことが必要だ。

◇会長

事務局の方で修正し、「若者が集い、生き生きと活躍できる持続可能な地域社会づくり」がテーマとして提案されたが、いかがか。委員の皆さんが感じている課題について網羅されるテーマとなっているか検討していただきたい。

◆委員

青森という言葉を入れたいのだが、「青森県の」とすると硬い感じがするので、二期のテーマのようにひらがな表記にするといいのではないか。

◆委員

私は「あおもりの」にすると青森出身者限定みたいになってしまうので、「あおもりで若者が」と表現すると、受け入れる意味も含まれていくのでいいのではないかと考える。

◇会長

他の委員の皆さんも納得されているようだ。出身地の話にするのではなく、場所を特定するという意味で「あおもりで」の文言を加え、これから2年間審議していくということにしたい。確認するが「あおもりで若者が集い、生き生きと活躍できる持続可能な地域社会づくり」ということで決定したいと思う。

#### **(4) その他**

※資料4に基づき、事務局から説明